いつでも指示を素直に聞き行動できる子

～指示をよく聞いて、落ち着いてからだを動かす子～

1．対象児（H・K　高1男）のプロフィール

(1) 障害名　中度精神発達遅滞

(2) 生育歴

・昭和49年3月21日生まれ　安産（出生時体重2930ｇ）

・歩き始め　1歳4か月　幼児期に特に異常なし

・A保育所（2年）──→A小学校（6年）──→A中学校（3年）──→専修職業訓練校（1年）──→本校高等部入学

・家族は、父母と3人家族

・学校教育に対し期待はしているが、父母の参加は消極的。学校からの文書による連絡はつきにくい。

(3) 本生徒の実態

①運動能力テスト　（「資料編」参照）

②体力テスト　（「資料編」参照）

③諸検査　ＷＩＳＫ－Ｒ46

④性格・行動上の特徴

責任感があり、係活動、そうじ当番等の仕事に真面目に取り組んでいる。しかし、両手をバランスよく動かすことができないため不器用で、仕事は雑である。また、生活全般にわたり未経験なことが多く、目的に合った動きや自分の意思に沿った動きができないことがある。

独り言が多く、緊張すると声が裏声のようになり、大きな声が出ない。4月当初は大変おどおどした感じで消極的であったが、自信をつけていくに従い、積極性が出てきた。その反面、指示をされても相手によって指示を無視したり、自分のやり方に固執して素直にきけなかったり、他人を嘲笑するような態度をよくとる等の問題点がある。

2．各場面での実践例

(1) 保健体育　〈Bグループ〉

①ねらい

・運動そのものの持つ楽しさを体得させ、少しでも進んで生き生きと運動することができる。

・運動経験を積み重ね、運動技能の向上と運動機能の促進を図る。

・「できた」「がんばれた」という喜びや充実感を味わわせる。

②方針と手だて

運動経験に乏しく、動き全体がぎこちないため、なるべく多くの運動を経験させるよう努めた。例えば、準備運動の種目を多くしたり、楽しみながら身体を動かせるように音楽を流したりの工夫をしている。新しい運動のやり方については細かな指示を与え、取り組みやすくした。

また、記録や競争意識を高めるために具体的な目標を設定し、意欲や集中力を高めたり、集団スポーツを意図的に取り上げ、チームの中で活躍の場を与えることによって自信をつけさせたりしている。

③実践例

入学当初、本生徒は声も小さくおどおどした感じであったが「走る」ことを通して自信をつけ積極性も出てきた。また、いろいろな運動を経験することによってからだを動かす楽しさを体得し、それに伴って、今まで発揮されなかった力が発現して体力的にも運動能力的にも向上しつつある。主な変容は下記のとおりである。

実施内容	初めの実態	方針と手だて	変容
準備運動 ひざ屈伸・体側・体回旋・前後屈など	大変身体がかたく、前後屈、体回旋等の運動がなかなかできない。いつも肘、ひざが曲っていた。やり方が分からず、周りを見回していることもあった。	一つひとつの運動を確実にするよう時間を与える。また意図的に示範を見せ、個別に指導する。	まだまだぎこちなさは残っているが、からだ全体の動きがスムーズになりつつある。前屈の時、ひざがあまり曲がらなくなった。他生徒に遅れることも少なくなった。
短距離走 ・8秒間走 ・10秒間走 ・50m走	腕の振り方、手足のバランスが悪い。大またで跳ぶようにドタバタと走り余分な力も入っていた。走ることに対しての意欲は高い。	肘を曲げて腕を振るよう指示を与える。また、低くスタートできるようクラウチングスタートを意識づけ、歩幅を狭くさせる。	肘を正しく曲げて振ることはまだできないが、余分な力を入れることが少なくなった。手足のバランスがよくなり、動きがスムーズになりつつある。
リレー ・バトンタッチの練習 ・走順決め	バトンタッチの練習は、上級生の指示を待ち動くという消極的なものだった。右手渡し左手受けができず困っていた。	予め半身で構えさせ、「ハイ」という声かけをするようにさせる。繰り返しの練習により体得させる。	練習の時はあせらずに正しくバトンタッチができていたが、本番ではあせってしまいできなかった。とても楽しそうに取り組めた。
バスケットボール ・チーム作り ・ルール作り ・ゲーム	ボールを使った準備運動では、ボールをよく落とし、素早く動くことができなかった。意欲があり、ゲーム中は積極的に動けたが、相手の動きに応じた動きはできなかった。	ボールを使った運動では、ゆっくりと確実にするよう声かけをする。常にボールをよく見るように心がけさせる。	汗をいっぱいにかき、生き生きと取り組めた。ボールを落とす回数も減り、ドリブルや味方へのパスもできるようになってきた。

—運動能力測定・体力テストの結果（抜粋）—

	運動能力測定			体力テスト			
種目	50メートル走	ボール投げ	斜め懸垂	垂直跳び	立位体前屈	伏が上体そらし	反復横とび
4月	8'95"	10 m	17回	32 cm	2 cm	29 cm	21回
10月	8'64"	11 m	16回	35 cm	1 cm	32 cm	22回

(2) 養護・訓練〈C2グループ〉

①ねらい

・自分の能力や体力に応じて運動し、調整力や筋力等を高める。

・自分のからだへの関心を高め、少しでもすすんで取り組む。

②方針と手だて

・運動のやり方を知らせ、一つひとつの運動を正確に行わせる。示範演技の模倣をすることによりやり方を体得させる。

・同じトレーニングメニューを繰り返すことにより、見通しを持って自主的に取り組む態度を養ったり、より高い目標に向けての意欲を持たせたりする。

―トレーニングメニュー――

手具（主にボール）を使った運動　→　調整力の養成	力試しの運動→筋力強化
・ドリブル・８の字回し　・バウンドキャッチ　等　13種目	・コンパス・うまとび等
←――――15分――――→	←――5分――→

③実践例

運動経験に乏しく、協応動作、巧緻性の能力が劣っている。

⬇

・手足がスムーズに動かない。

・ボールの扱いがうまくできない。

・運動そのもののやり方が分からない。

繰り返しの指導→⬇←的確な指示

・回を重ねることによりボールの扱いに慣れてきた。

・ミスが少なくなり、運動の楽しさが増してきた。

・１回もできなかった運動が10回程度できるようになり、次の目標に向けての意欲へとつながっている。

全体的に見て、４月当初に比べ身体の動きがスムーズになってきた。初めは、ドリブル、投げたボールを受ける等の、普通ならごく自然に幼児期から少年期にかけて経験し身についているであろう事が全くといっていいほどできず、ここに来て初めて出会う運動という感じすら受けるような状態であった。教師の１つ１つの運動への指示をしっかり聞き、それを守ろうとする態度が見られ出し技術の習得へつながったようである。

(3)　職業〈技能グループ〉

①ねらい

・印刷の各工程の技能習得の過程を通して、自主的に作業に取り組む態度や習慣を養う。

・根気強く取り組むこと、指示をよく聞きよく考えて行動することの大切さを知る。

・担当工程に責任を持ち、協力する態度を養う。

②方針と手だて

印刷の経験はなく、全くの初心者であるが印刷に対する興味関心はある。そこで、教師または

上級生が１対１対応で個別指導を行い、各工程の技術の習得を目指した。また、自主的な学習態度を身につけさせるため、前時の反省会の時に次時の学習内容を告げ、その都度指示がなくても自主的に作業に取りかかれるようにした。

また、初めての学習であるので、

・教師、上級生の説明・指示をしっかり聞く。

・分からない時は「分かりません」とはっきり言う。

ということを徹底し、作業に取り組ませている。

③実践例

	初めの実態	変容
印刷技術	手指の動きがぎこちなく、拾った活字がすぐ倒れる。	左手の手のひらをねじる持ち方の練習を続けた結果、拾い箱のゆれが少なくなり、活字を倒す回数も減少して、２列までは並べることができるようになった。
	「さ」と「ち」、「か」と「さ」等をよくまちがえる。	同じ文章を何回も拾う練習をすることにより、活字の場所を覚えていき、ミスもだんだんと少なくなってきた。
	活字を拾うのに時間がかかる。	ドリル学習によって活字の場所を覚え、以前より速く拾えるようにはなったが、まだまだ時間がかかり、他生徒と同じようなペースでは拾えない。
作業態度	指示者の顔を見ずに話を聞き、指示に対しても笑ってごまかすことが多い。	口をしめて、指示者を見ながら話が聞けるようになった。しかし、指示されたことに対して、早のみこみをしてよく考えずにすることが時々ある。

３．考察及び今後の課題

生活全体を通じて未経験なことが多く、からだの動きがぎこちなかったり、気持ちだけが先走って余分な力が入ってしまったりしていたのが、いろいろな動きを経験することにより、力の入れ方、抜き方、手足の動かし方等が分かってきたようである。まず「走る」ことで自信をつけた本生徒は、他の活動にもその自信を拡げ入学当初の消極的な態度から現在の積極的な態度へと変容していったと言えよう。この時、持っている力をタイミングよく引き出し伸ばしていくような適切な指示を教師側が与え、それを素直に聞いて実行にうつそうとする態度を養うという指導を繰り返し行ってきた。

学部・学級内では自信を持って活動できはじめた本生徒ではあるが、今後は、高等部という社会に出る一歩手前にある立場を見すえて、厳しい社会生活に適応し、好ましい人間関係が培っていけるようにしなければならない。今までの実践で得た自信をバネに、自立し、相手の立場に立って物事が考えられるような人間となるよう更に指導を進めていきたい。　（文責　木下　志津）